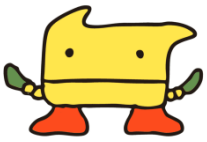
嬉望

第２号
令和２年12月18日
兵庫教育大学
教職大学院
学校経営コース
大学院生編集部
（坂本　高橋）

「嬉望」は、本学加東キャンパスが嬉野台地区にあることと、「希望」とをかけた造語です。



ひょうちゃん
大学マスコット

理論と実践の融合
～学び深みゆく秋～

十月より、対面での授業が再開したとともに、二年生はインターンシップ、一年生は先進校視察、フィールドワークに参加し、理論と実践の融合による学びを深めています。

インターンシップ報告

山口県　周南市教育委員会
西村　隆一

八月二十四日（月）から十月二十三日（金）の九週間にわたって、山口県周南市教育委員会学校教育課でのインターンシップを行いました。以前、指導主事として勤務していたこともあり、当時も教育委員会においられた教育部長からの「おかえりなさい」の温かい言葉から、インターンシップが始まりました。新型コロナ感染症の影響のため、その対応に大変忙しい中、課長をはじめ、指導主事の方々、行政職員の方々には快くインタビュー等に対応していただきました。私自身も学校教育課の業務の支援をさせていただくことはできないかと考え、ＧＩＧＡスクール構想の前倒しによる一人一台タブレット整備事業に伴う、市立学校の情報セキュリティポリシーの改定に携わりました。この業務を通して、ＩＣＴの活用を通して、これからの子どもの学びが大きく変わることになるということを実感することができました。

また、今回のインターンシップの中で、周南市におけるコミュニティ・スクールの取組の状況と課題を把握し、改善プラン作成につなげることをねらいとしていたことから、市内各校で開催される学校運営協議会や地域と連携した授業等を参観する機会を得ました。今年度は、新型コロナへの感染防止のため、学校と地域の連携が停滞していましたが、九月に入り、感染を防ぐ工夫をしながら、連携の歩みを再開するところが増えていました。市内の中学校においては、社会科の授業の中で、地域づくりを題材に取り上げ、生徒がまちづくりデザインを市や地域に提案する様子を見せていただきました。中学生の視点で現在、地域にあるものを以下に活かしていくかというアイデアを地域の方とともに検討されていました。新しい生活様式の中で密を避けながらも、中馬教育長の語る「心は密である」ことを維持し、子どもと地域がつながり続けることの大切さを感じることができました。貴重な経験をさせていただいた周南市教育委員会、市内各小中学校に心から感謝申し上げます。

＜地域と子どもの学び＞

◆　◇　◆　◇　◆

鳥取県立米子東高等学校
橋井　哲朗

夏休み中の八月二十四日（月）より冬の訪れも感じられる十月二十三日（金）までの九週間にわたり、現任校である鳥取県立米子東高等学校でインターンシップを行いました。管理職の方々は私の職能成長を親身となってサポートしてくださり、日常の業務観察や会話、管理職協議等への参加、校長シャドウイング、副校長・教頭・事務長からの指導助言、また、時に管理職業務を割り振っていただくことなどを通じて、これまでの一教諭としての視点とは異なる俯瞰的な視点で学校を捉え、管理職の学校運営の実際や思いを知ることができました。特に新型コロナという未知の危機に対する徹底した対応ぶりや、地域・保護者・教育委員会などのステークホルダーに対する積極的かつ丁寧な接し方には学ぶことが多く、大学院の講義での理論と現場での実践が融合して自身のキャリアの両輪となった気がします。

校長の姿からは、常に周囲にアンテナを張って「変化に気づく」という危機管理のあり方の基本や、当事者意識をもって自身が校長のつもりで考え、振る舞う責任感の重要性を学びました。また、オンライン授業をいち早く導入するなどの先見性やスピード感を持った意思決定も肌で感じることができました。副校長には毎日たくさんの資料をもとに丁寧な指導助言をいただいたり、時には中学校の校長や指導主事への質問の機会を与えていただいたりしました。そして副校長や教頭の日常の姿からは管理職間の情報共有の重要性を学びました。

教職員の皆さんにはインタビューや授業参観に快く応じ、真摯に対応いただくことで研究課題を明確にすることができました。インタビューや授業参観のフィードバックの際に逆にお礼を言われることで職員集団の温かさを感じ、この組織をより良いものにするために尽力したいという思いを強くしました。

また、学校祭や球技大会、Ｓ

ＳＨの事業等の行事への参加、授業参観、インタビュー等を通じて生徒の実態についての新たな認識を持つことができました。大学院での学びを経て複眼的に見る生徒の姿は時には物足りなくもあり、部活動などの課外活動や行事だけでなく、日常の教科指導等を通じて主体性やリーダーシップを系統的に身につけさせるカリキュラム・マネジメントの必要性を感じました。

校長・副校長は今年で定年退職を迎えられるため、もう一度一緒に仕事をすることは叶いませんが、いただいた恩に報いられるよう、今回の経験をもとに残りの大学院での学びをさらに充実させて鳥取県の教育へ貢献できるよう精進していきたいと思います。今回のインターンシップという実践の場を与えていただき中間報告会では厳しくも温かい指導助言をくださった大学の先生方、ご指導いただいた教育委員会や関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

＜中学生体験入学時
書道部パフォーマンス＞

●○●○●

兵庫県立湊川高等学校

大崎　みずほ

「感謝」

まずは八月二十四（月）～十月二十三日（金）の二か月間、お忙しい中インターンシップを受け入れてくださった湊川高等学校の皆様に心よりお礼申し上げます。非常に恵まれていたと感謝しております。

水畑校長先生の多大なるご協力のもと、校長シャドウイングを長期間にわたり行わせていただいたことで、ビジョン・組織づくり・人材育成・管理職に必要な視点等、学校組織マネジメントについて学ぶことができました。出張時や来客時以外は校長室に居させていただいたので、何気ない日常から校長の職務や考えを伺い知ることができ、教育次長との面会や教育委員会訪問の同行、定時制通信制理事会の傍聴において校長の外部でのマネジメントについても学ぶことができました。

インターンシップ中、少しでも現任校に貢献したい、また教員に危機感をもってもらいたいという思いから、セミナーとしてＳＷＯＴ分析を職員研修会で行わせていただきました。学校を取り巻く環境の共有が全教員でできず、また自分が考えていた課題以外の現任校の課題を把握することができました。教員聞き取り調査では各自が考えるめざす学校像・生徒像といったビジョンや課題、考え、学校を良くしたいという思いを聴くことができました。コロナによって給食時の盛り付けが管理職の仕事となり、校長とともに毎日白米を茶碗に盛ることも行いました。また給食後には食堂のアクリル板消毒作業を行い、コロナによる教員の負担増を実感しました。学校評議員会傍聴と議事録作成では、地域の方々が学校を温かい目で見てくれていることがよく分かりました。

今回のインターンシップを通して、学校全体を学校運営・学校経営の視点で見つめることができたのは大きな成果であったと考えています。学校の最大の特色である完全給食も必要不可欠であると改めて実感できました。生徒はニコニコとお盆を持ってきて、ご飯を受け取るときには礼を言い、友人と楽しく食事をしており、情操教育にも一役買っていると感じました。また、大学院生として学んだ知見をもとに研修会では講師として、オープンハイスクールのポスター作りにおいては助言ができ、観察を通じ気になったことは提言として校長にお伝えできました。聞き取り調査では教員の時には気がつかなかった、教員一人一人の熱き思いを聴けたのも有意義でした。と同時に私に期待と応援をしてくれていることもひしひしと感じました。教職員と生徒の声や思いを生かした改善プランを作成したいと考えています。協力してくださった皆さんへの恩返しが、さらには兵庫県への貢献につながると確信しています。

先進校視察報告

山口県立田布施総合支援学校

藤本　寿雄

先進校視察として山口県立田布施総合支援学校に訪問させていただきました。平成二十九年に学校運営協議会を設置、令和二年九月に高等部が町の中心部に移転し、新たな取組が始まっている学校です。

学校には九月、十月と二度、訪問をさせていただいています。校長先生からはコミュニティ・スクールを活かした地域連携教育の推進、教頭先生からは高等部の地域協働実践、学校運営協議会事務局長の先生からはコミュニティ・スクールについて、それぞれお話を伺うことができました。

校長先生は『縁』をつなぐことを大切にし、リーダーシップを発揮した学校運営に取り組まれています。教頭先生は学校運営協議会での話し合いを話し合いで終わることなく、実行することに取り組まれています。学校運営協議会事務局長の先生は地域への情報発信、ポジティブなテーマを議題とした協議会運営に取り組まれています。これら学校の取組は共生社会の実現に向けて、学校を地域に知ってもらい、卒業生の地域での暮らしにつながる活動です。

地域とともにある学校として、新しい高等部校舎では喫茶サービス室、地域交流室等、地域の方々が学校に立ち寄りつながる活動を展開されていま

す。小中学部校舎では、空き教室を地域の方々と活用することを計画されています。さらに、町との連携による学習支援ボランティア、県内の高等学校と連携し強みを活かして商品を開発し価値を高める取組など、特色ある学校づくりを学ぶことができました。

次回は十一月に訪問をさせていただき、卒業後の生活と就労に向けた実践を学んでいきたいと考えています。

●○●○●

高知県立山田高等学校

徳永　志保

十月七日（水）、先進校視察として、高知県立山田高等学校を訪問しました。山田高校との出会いは、昨年度の『月刊高校教育』八月号でした。濱田久美子前校長先生の手による山田高校の紹介が印象的だったのです。

濱田前校長先生は、着任早々、地域に根ざした学校づくりをスタートさせ、国の学校地域協働本部事業の受託による「地域課題探究学習」事業の立ち上げ、商業科による商品開発の実践など、アイデアを次々と実現させていきます。そして、濱田前校長先生のもと、教頭・副校長を務められた正木章彦現校長先生にも、そのポリシーは継承されました。本年度から「普通科」「ビジネス探究科」「グローバル探究科」の併置校として再出発した山田高校は、「探究する学校」をスローガンに、生徒の主体的な学びを充実させています。正木校長先生は、「学校を変えるには、たとえ（教員から）嫌われてもやるんだという『覚悟』が必要。でも、生徒が成長する姿を見ると、皆、分かってくれる」と、管理職としての心構えを話してくださいました。

また、十月二十一日（水）には、高知県教育センターを訪問し、濱田久美子前校長先生からお話を伺うことができました。「子ども達にとって何が必要なのかを考えるのが楽しい」というお言葉に、濱田前校長先生の教育に対する情熱を感じました。

＜探究学習の様子＞

十二月三日（木）には、再度、山田高校を訪問し、進路課長や探究学習担当の先生方からお話を伺う予定です。これらの学びを通して得られた知見を現任校の改善プランに活かしていこうと思います。

フィールドワーク報告

和歌山県　上富田町立生馬小学校

佐野　崇幸

十一月十八日（水）和歌山県西牟婁郡の山間にある生馬小学校を視察訪問させていただきました。生馬小学校は二年間の町研究指定を受け、ＳＤＧｓを踏まえた社会に開かれた教科横断的なカリキュラム・マネジメント（一年次）に取り組んでいます。自然豊かな学習環境、一人ひとりの児童のよさを大切に育む温かな教育環境と学習活動を教職員全員で紡ぎ、生馬小学校らしい教育カリキュラムを見つけ出そうとする姿から、学び続ける学校、学び続ける教師のあるべき姿を再認識しました。

公開授業は四年生国語科でした。児童は、伝統工芸品である紀州漆器と備長炭についてリーフレットを作成するため、付箋を用いて収集した情報を整理分類する学習活動に取り組みました。その後の校内研修会では、よりよいカリキュラムを目指し、授業内容だけでなく、社会科や総合的な学習の時間とのつながりにまで熱い協議が行われました。

また「カリキュラム・マネジメントについて」と題した本大学院安藤准教授の講義では、教育課程とカリキュラムの違いやカリキュラム・マネジメントを困難にしている学年や教科などの壁について、具体例を踏まえた学びがありました。このような学びを管理職が意図的に仕組み、教職員全体で共有すること、日々の実践を踏まえた理論と実践の往還を行うこと、理論に基づいたＰＤＣＡサイクルを回すことの大切さを私自身が改めて実感する貴重な機会となりました。

◆◇◆◇◆

芦屋市立学校長研修

石橋　千恵

十一月四日（水）に芦屋市立打出教育文化センターにおいて実施された、芦屋市立学校長研修会を、本コース一年生の七名が聴講しました。研修では本教職大学院の安藤准教授が「コミュニティ・スクール（学校運営協議会）とは」をテーマに講義をされました。今なぜコミュニティ・スクールが必要なのかを最近の情勢を踏まえ説明しました。教員のもつ情熱により現在の日本の教育水準が保たれていること、新学習指導要領になったからと言って今までやってきたことを急に方向転換するということではないこと、以前から取り組んでいる実践に加え児童・生徒に何を学ばせたいのかという意識を持つことの重要性を話されました。

児童生徒数の減少、規範意識の低下、課題の複雑化により学校だけでは抱えきれない問題が増えてきた今、学校と地域が協働して問題解決に向かわなければなりません。それは、学校の課題だけでなく、地域の課題もしかりです。社会全体で子育てできる環境を整備し、点から面で対応できるような仕組みづくりが、持続可能社会を実現するためには必要なのです。それらの仕組みづくりには、地域をつなぐ学校が果たす役割が大きいということを教員である私たちは今一度、押さえて

おくべきことだと感じました。

コミュニティ・スクールの導入がさまざまな自治体で始まっています。どの自治体でも、これまでも地域資源を活用した教育がなされていました。これまでとの違いは、学校と地域の連携をさらに強化し、一足す一が二になるだけでなく、三にもなるような相乗効果を生み出す教育の場へと変換が求められているということを忘れず、実践を重ねていきたいと思いました。

南あわじ市学校視察報告

南あわじ市立阿万小学校訪問「南あわじ市学校視察報告」

水野　直樹

十一月十二日(木)、南あわじ市立阿万小学校、南あわじ市立西淡中学校、兵庫県立淡路三原高等学校の視察を行いました。この視察における学びは、同一事象を視察して、優れている点、改善が必要な点を参加者相互に意見交換し、共通見解として報告書を作成することにあると考えます。

＜教頭による学校施設の説明＞

視察当日は午前八時から学校を訪問し終日視察させていただきました。断片的で限られた時間ではありましたが、学校の特色や課題について個人で感想を持ち、その後参加者同士で意見交換を行いました。意見交換では、校種は異なっても学校の課題について院生相互に似通った感想が聞かれるとともに、他校種の視点からの斬新な意見が述べられていました。

視察校における協議及びフィードバックでは、先方にどのように伝えるかの困難さを感じました。視察後の感想の肯定や否定ばかりでなく、学校現場の指導の困難さに共感しつつ、別の視点から解決策を提示したり新たな視点を提供したりすることが大切ではないかと感じました。

＜授業参観＞

●○●○●

南あわじ市西淡中学校訪問

大牧　愛由美

十一月の青空の下、西淡中学校の校門で出迎えてくれたのはたくさんの鬼瓦。そうだ！ここは、南あわじ市、四百年の歴史を持つ淡路瓦の故郷。花壇にも壁面の卒業記念の作品にも淡路瓦の伝統が見え隠れしていました。総合的な学習の時間を使った地域学習やキャリア教育では、地場産業をはじめとした地域人材を広く活用し、ゲストティチャー、体験学習を取り入れておられました。それらが実現可能なのは、同中学校の卒業生も多く、協力的であることをお聞きました。小中連携を推進している当校では、世界に誇る伝統芸能を学ぶ「コアカリキュラム」があり、小中学校九年間で取り組んでおられました。淡路人形座の方を招いての淡路人形浄瑠璃体験もその一つです。自分たちの故郷を誇りに思う子ども達を育むこと、そして、それを温かく見守る地域の姿を感じました。西淡中学校としての歴史は浅く、二〇一三年(平成二十五年)四月一日 御原中学校と辰美中学校を統合し、開校されました。統合のため、バス通学をすることになった地域の方から「子ども達の声が聞こえなくなりさみしい」との声があったのですが、その言葉を深く受け止め、地域にとっての学校とは何か、つながりを大切にするためにできることは何かを考えた校長先生のお話が印象的でした。

七月には、全校生による松原清掃が行われました。生徒の考えたスローガンは「未来を残そう美しいふるさと慶野松原」。五十四年間脈々と続けられ、その活動の中に、過去・現在・未来へとつなぐ郷土愛がありました。それは、地域の方と子ども達をつなぐ共通の想いでもあると感じました。校訓は「仲間と助け合おう(海の心)、人となりを磨こう(山の心)、思いやりを持とう(恕の心)」。掃除の行き届いた校舎、仲間とともに笑顔で教室を移動する生徒たち、その爽やかな挨拶に心地よさを感じました。その校舎から見える松原も輝いていました。

◆　◇　◆　◇　◆

兵庫県立淡路三原高等学校を訪問して

田中　暁宏

今回は、学校の改善に資する提案や協議を行う目的で本大学と連携協定を結んでいる南あわじ市に所在する淡路三原高校を訪問しました。「学校組織マネジメントと学校評価」の授業の一環であり、学校の現状を把握・分析し、改善方策の提言を行うことにより、私たちの学校経営能力の開発を目指す目的でもありました。

現地到着すぐに、登校の様子から視察を開始しましたが、生徒は気持ちのよい挨拶をしてくれ、爽やかな印象を持つと同時に、部活動が盛んとも聞いていたので、礼儀正しさも伝わってきました。授業前の朝学習は、一限から落ち着いた状態で授業が受けられるようにと設定されていました。また授業はもちろん、自習時間であっても、どの教室も集中している姿に感心させられました。校長からは、これまでとは違った幅の広い学力層に対応するよう、特色ある類型をさらに見直し、生徒ニーズに合わせ改革中であると説明を受けました。授業改善や組織改善、働き方改革を進められており、時代に沿った学校運営をされているのだと感じました。

この視察の結果は、授業等で分析し、報告書にまとめる予定ですので、そちらで詳細は述べたいと思います。第三者評価の側面を持つこの視察は、鋭い指摘をする難しさを感じるなど、学びの多い貴重な体験となりました。